

(341) 社内資料のシステムについて

(新日本製鐵製品技術研究所における技術情報管理)

新日本製鐵株式会社 製品技術研究所

東松良光

○ 中島康男

研究開発活動に有効な情報源と考えられる社内資料を対象とし、その内容、取扱い手法の確立に検討を加え、収集、蓄積および検索のできる管理体制を整えた。これにより研究者は社内資料の収集状況を知ることができ、また遡及検索が可能となった、当製品技術研究所の社内資料の収集、蓄積および検索システムについて報告する。

社内資料は各研究所、製鉄所の研究活動の活躍と技術スタッフの充実により急激に増加し、研究者は自己の専門分野の社内資料を、完全に把握することが不可能となっている。しかし社内資料は技術の研究開発を考える上で、自社技術を適確に把握するためにはなくてはならないものであり、また従来やゝもすれば同じような大掛な実験を、各所で重複して行っているのを防ぐためにも、このシステムの確立が社内資料の有効、かつ効果的な利用に結びつき、情報管理担当部門としては必要な業務の一つとなってきた。

社内資料の収集は当製品技術研究所、本社、各研究所、および製鉄所で発生するものがある。

当所で発生する報告書などについてはデポジット機能を持つ当資料室へ自動的に集まるシステムになっている。

また他の研究所、製鉄所とは各所情報管理担当部門とネットワークを組み、図書、雑誌などの資料の有効利用をはかっている。社内資料についても同様に流通するシステムとなっている。

収集した社内資料は各発行元別、さらに報告書別に整理配架している。

最近資料の激増のため、社内資料の一部はマイクロフィルム化(マイクロフィッシュ使用)している。

研究報告書のマイクロ化は本社技術情報室で実施しており、当資料室ではその他の報告書について実施している。このようにして収集、蓄積した社内資料も検索のツールがなければ、有効かつ効果的に利用することができない。そこで当所は検索のツールとして冊子体の報告書目録とカードを使用している。カードは研究報告書および技術報告書については本社技術情報室が作成しており、当所ではその他のものについて作成し、整備を行っている。カードは3インチ×5インチの大きさに、所属、著者、分類(UDC)、抄録などを入れて作成している。カードは所属別、著者別、主題別(UDC)の各項目別に整理し、検索できるようにしている。現在では社内資料の量などあらゆる点から検討した結果、カードによる手検索で十分であると考えているが、今後の社内資料の増加をみる時、機械検索の方向に移行していくと考えられる。機械化の一段階として、カードセレクターについて検討した結果一応の成算は得た。現在さらに電子計算機による検索体制の検討を行っている。

今後は検索装置としての電子計算機と蓄積用のマイクロフィルムを、結び合せたCOMシステムなども検討の課題になるものと考えられる。

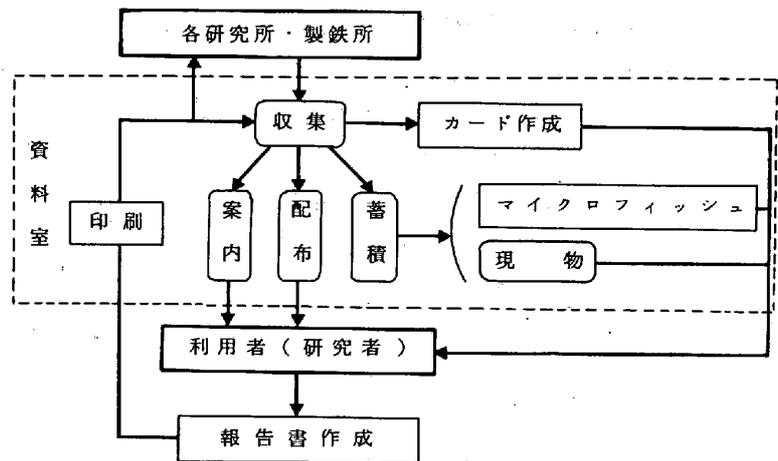


図 当所の社内資料システムの流通機構について